平成28年２月18日（木）於板橋校舎３号館305教室

平成27年度大東文化大学大学院　文学研究科書道学専攻特別講義

国宝金印「漢委奴国王」印の印学的研究

大阪芸術大学芸術学部客員教授
久　米　雅　雄

１．はじめに

２．金印「漢委奴国王」印の発見と研究略史（図１）

１）江戸時代の金印研究史―ヤマトノ国説・ワヌ国説・伊都国説と偽作説―

・金印発見以前：松下見林の大和国説（1688）、本居宣長のワヌ国説（1777）

・金印発見以後：亀井南冥のヤマトノ国説（1784）、藤貞幹（1784）・上田秋成（1785）・青柳種信（1812）の伊都国説、松浦道輔の偽作説（1836）

２）明治時代の新説―三宅米吉（1892）による「委奴＝倭の奴」国説の登場―

・倭は委と同じ、委はワ行のゐ、伊はア行のい、奴はなぬのでど音はなかった

３）昭和時代の戦前・戦後における金印の国宝指定と国の公式見解（図２）

・文化庁『国宝事典』（1961；1976）「その訓みについてはなお定説をみない」

３．久米雅雄「金印奴国説への反論」（1983）の発想と公表およびその波紋

・1968北山茂夫先生ゼミ、1970卒論で発表、『藤澤一夫先生古稀記念論集』（1983）

・『季刊考古学』第６号（1984）、岩波文庫『魏志倭人伝』（1985）、『論争学説日本の考古学』（1986）、京大『新編日本史辞典』（1990）、『国史大辞典』（1994）

４．国宝金印「漢委奴国王」印の印学的研究（図３）

①金印の印文を漢語単一論で読んでよいか？―揚雄の『方言』―（図３上段）

・王育徳「中国の方言」（1967）、李恕豪『揚雄方言與方言地理学研究』（2001）

・「秦晋」「周韓鄭」方言区から「呉越」方言区まで12、「楚夏聲異、南北語殊」「方言差別、固自不同、河北江南、最為鉅異」、漢呉並存　北京・華盛頓・日本

・『説文解字』『大漢和辞典』による読み⇒〔委奴〕ヰド、ヰヌ、〔倭奴〕ヰド、ワド、ヰヌ・ワヌ

∴印文の「委」をワと読むワド・ワヌ説は成立しがたい

②「委」と「倭」は印学的に同一か？―「侯」印と「候」印―（図３中段左）

・資料及び史料の価値決定と省画論：同時代性と現地性　委奴57・倭奴５世紀

・明の羅王常『秦漢印統』（1608）にみる亀鈕「侯」印と鼻鈕「候」印の区別

③印文は印学的に「漢の委の奴の国王」と分けてよめるか？（図３中段右）

・「漢匈奴悪適尸逐王」印の悪適は部族名か⇒「漢匈奴帰義親漢長」印との比較

・印文の構造は宗主国＋民族名or国名＋（修飾語）＋官号　「新難兜騎君」印

・修飾語の位置は？⇒「親魏倭王」により「魏率善倭中郎将」「魏率善倭校尉」

④金印時代前後の北九州弥生四王墓の分布について（図３下段左端・中）

・三雲南小路（糸島：鏡31＋22　前1世紀中葉）⇒須玖岡本（春日：鏡32　前１世紀～後半）⇒井原鑓溝（糸島：鏡21　後１世紀後半～末葉）⇒平原王墓（糸島：鏡５＋35　後3世紀前半）前１世紀～後３世紀にかけて伊都に集中

⑤「魏志倭人伝」の「伊都国」と「奴国」比較（図３下段右端）

・「東南陸行五百里到伊都国・・有千餘戸世有王皆統属女王国郡使往来常所駐」

・「東南至奴国百里官曰兕馬觚副曰卑奴母離有二萬餘戸」歴代複数の王は伊都に

⑥金印鋳造地「洛陽官工房」における使用語音は？

・洛陽故城の官工房から「部曲将印」63顆出土　廣陵王璽制作　漢音で「ゐど」

⑦漢文学からみた「漢の委の奴の国王」三段読み否定論とヤマト説の可能性

・佛教大学黄當時教授：三段読みは致命的欠陥を有す　三宅説は基礎の部分で認識に誤りがある　固執は不毛である（第８回金印シンポジウム志賀島2014）

・「委（倭）奴」という漢字を見せられてヤマトと読む中国人はいない

⑧江戸の印学と偽作説の蓋然性―高芙蓉・藤貞幹・亀井南冥―（図4上中下）

・国宝金印の原印と摹刻印（羅福頤・松丸東魚・佐藤桃巷）

・「封泥と印章」の真偽の鑑別：皇帝信璽・假司馬印・石洛侯印・晋帰義夷王

・高芙蓉『古今公私印記』（1760）、藤貞幹『好古日録』（1797）の「親魏倭王」、中井履軒「華胥国王之璽」（b1817）、亀井南冥旧蔵「東西南北人」（b1812）

・『秦漢印統』（1608）の印鈕図等に蛇鈕の型なし　精美細密の蛇鈕は群を越ゆ

・『後漢書』は「倭奴」、「王」字書体の識別不可、蛇鈕のモデルなし、技術不達

5．「漢委奴国王」金印・志賀島発見の謎（図５）

・「百姓甚兵衛口上書」（1784：津田源次郎宛、庄屋武蔵・組頭吉三・同勘蔵）

・『続風土記御調子ニ付調子書上帳』草稿（1820）

・『柳園古器略考』怡土郡井原村所堀出古鏡図考（1823）天明年中怡土郡井原村

・『筑前国続風土記拾遺』（1823）今より四十年前井原村の境内鑓溝と云地より

・『黒田新続家譜』（1844）伊都の県主を委奴国王と書きけるならし

・「漢委奴国王」金印は「口上書」より半年前の天明３年（1783）の夏に怡土郡の井原鑓溝遺跡で王墓発見の際に周辺農民の誰かによって掴みとられたもので、志賀島は二次埋置の場所であり発見劇は偽装されたものである。青柳種信手拓の鏡「方格規矩四神鏡」の年代は１世紀後半から末葉の埋置と符合す

6．まとめにかえて

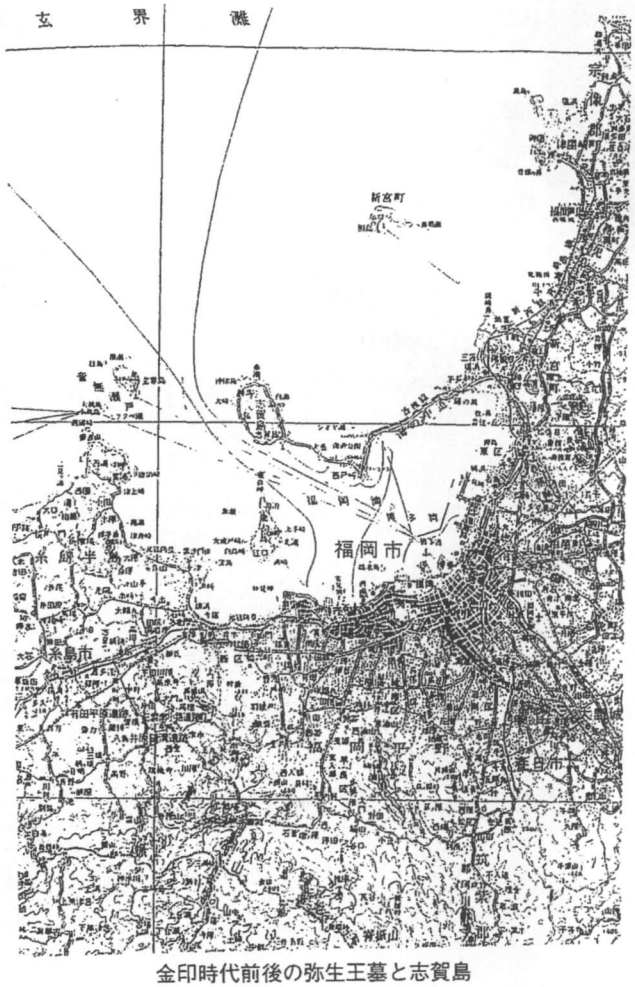
＜参考文献＞

大谷光男『研究史金印〈漢委奴国王印〉』吉川弘文館　1974

久米雅雄『日本印章史の研究』雄山閣　2004

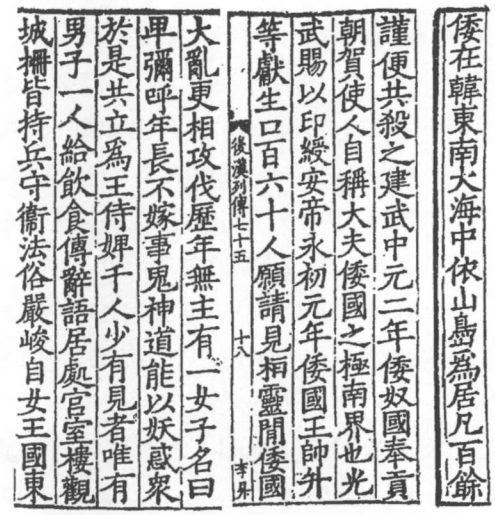
久米雅雄「漢魏晋南宋時代的日中交流史與冊封官印」西泠印社　2011　等々

図1



金印時代前後の弥生王墓と志賀島

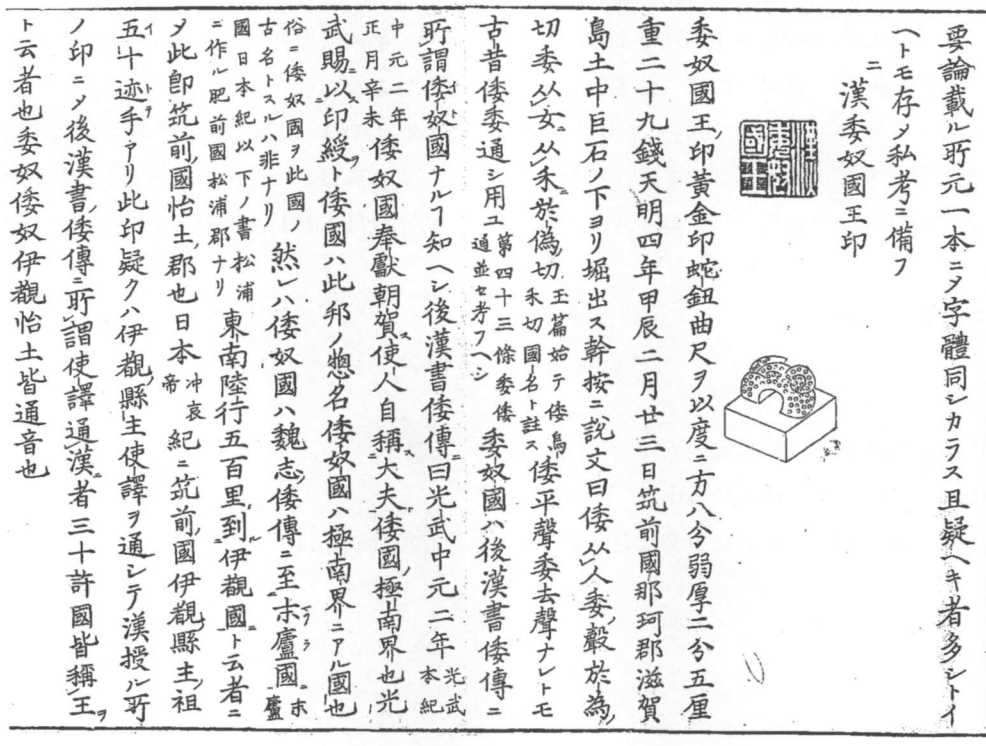
国宝金印「漢委奴国王」



倭在韓東南大海中依山島爲居凡百餘
謹便共殺之建武中元二年倭奴國奉貢
朝賀使人自稱大夫倭國之極南界也光
武賜以印綬安帝永初元年倭國王帥升
等獻生口百六十人願請見桓靈間倭國
大亂更相攻伐歷年無主有一女子名曰
卑彌呼年長不嫁事鬼神道能以妖惑衆
於是共立爲王侍婢千人少有見者唯有
男子一人給飲食傳辭語居處宮室樓觀
城柵皆持兵守衛法俗嚴峻自女王國東

後漢列傳七十五　十八　李昇

建武中元2年（57A.D）の朝貢（『後漢書』倭伝）



要論載ル所元一本ニハ字體同シカラス且疑ヘキ者多シトイ
ヘトモ存メ私考ニ備フ
漢委奴國王印
委奴國王印黃金印蛇鈕曲尺ヲ以度ニ方八分弱厚二分五厘
重二十九錢天明四年甲辰二月廿三日筑前國那珂郡滋賀
島土中巨石ノ下ヨリ堀出ス幹按ニ說文曰倭从人委穀於爲
切委从女从禾於僞切（玉篇始テ倭烏禾切國名ト註ス）倭平聲委去聲ナレトモ
古昔倭委通シ用ユ（第四十三條委倭通並セ考フヘシ）委奴國ハ後漢書倭傳ニ
所謂倭奴國ナルヿ知ヘシ後漢書倭傳曰光武中元二年（光武本紀）
中元二年倭奴國奉獻朝賀使人自稱大夫倭國極南界也光
武賜以印綬ト倭國ハ此邦ノ惣名倭奴國ハ極南界ニアル國也
（正月辛未）
俗ニ倭奴國ヲ此國ノ古名トスルハ非ナリ　然レハ倭奴國ハ魏志倭傳ニ至ル盧國（ホ盧國日本紀以下ノ書松浦ニ作ル肥前國松浦郡ナリ）東南陸行五百里到ル伊覩國ト云者ニ
ヤ此卽筑前國怡土郡也日本（冲哀帝）紀ニ筑前國伊覩縣主祖
五十迹手アリ此印疑クハ伊覩縣主使譯ヲ通シテ漢授ル所
ノ印ニヤ後漢書倭傳ニ所謂使譯通漢者三十許國皆稱王ヲ
ト云者也委奴倭奴伊覩怡土皆通音也

図2

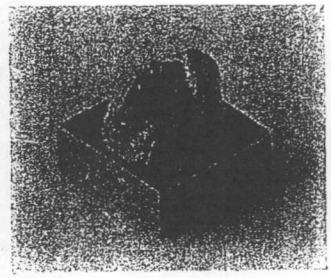
上考

考古

金印（きんいん）　印文「漢委奴國王」一顆　東京都　黒田長礼

印面方二・三六　高さ二・二四　上古

金製。印面が方形の刻印で、白文三行、初行は一字、二・三行は各二字で「漢委奴國王」とある。書体は篆書（てんしょ）。蛇鈕（だちゅう）で鈕孔が貫かれている。保存状態は完好である。この金印は、天明四年（一七八四）二月に福岡県糟屋郡志賀島村で農夫が田の溝さらいをしていた時、石の下から発見したと伝えられるもので、その遺跡がどのような種類のものであったかわからない。後漢書（中国南北朝時代、范曄撰）列伝第七十五、倭国の条には「建武中元二年（五七）に倭奴国奉貢朝賀す。使人自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以ってす」という記事があるが、この金印がその時のもの自体であるかどうか断定できないけれども、その形態は漢代の制に従い、この種の文献の伝えるところを裏書きする貴重な資料ということはできる。その訓みについてはなお定説をみない。



国宝事典　新増補改訂版

昭和51年12月4日　印刷
昭和51年12月10日　発行

編者　©文化庁
印刷並発行者　株式会社便利堂　代表者　石黒豊次

発行所　株式会社　便利堂
本社　京都市中京区新町通竹屋町南
振替　京都9171番
東京営業所　東京都千代田区有楽町1—6—5
振替　東京44795番

乱丁本・落丁本はお取替いたします。

昭和三十六年三月印刷
昭和三十六年三月発行

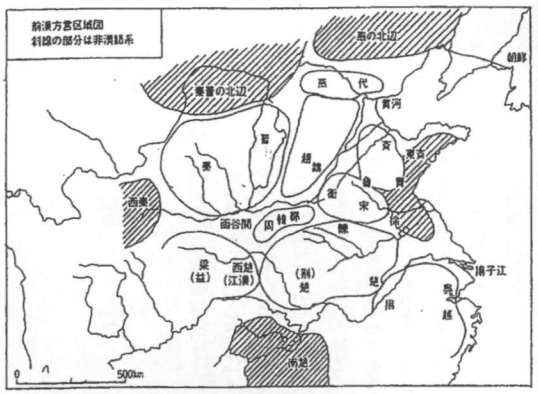
国宝事典　非売品

不許複製

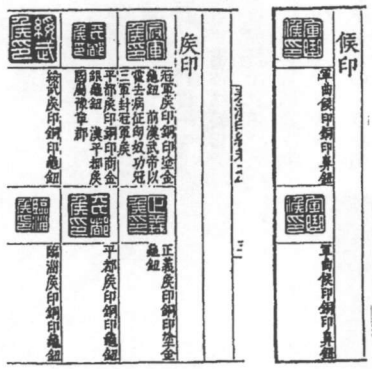
編者
発行者　東京都千代田区霞ケ関三ノ四
文化財保護委員会

印刷者　京都市中京区新町通竹屋町南入ル
株式会社　便利堂

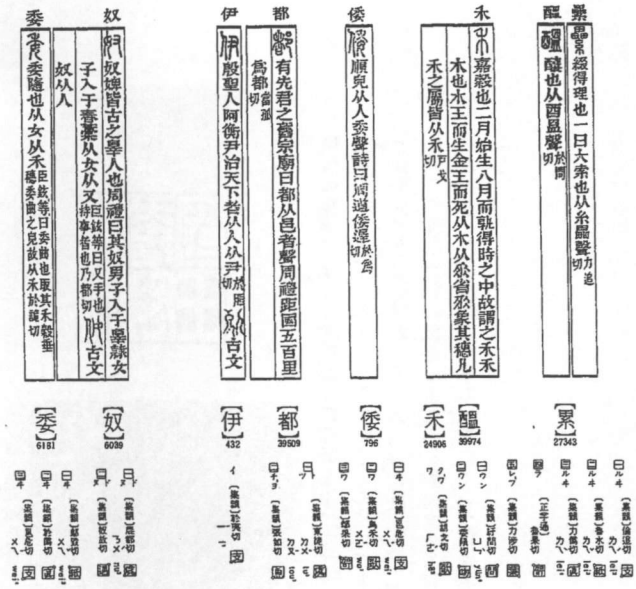
図 3

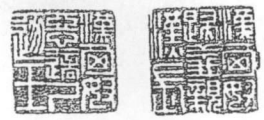


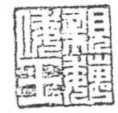
前漢時代の方言区画（林語堂「前漢区域考」による）



明代　羅王常『秦漢印統』(1608)

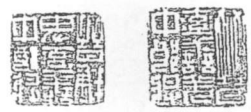




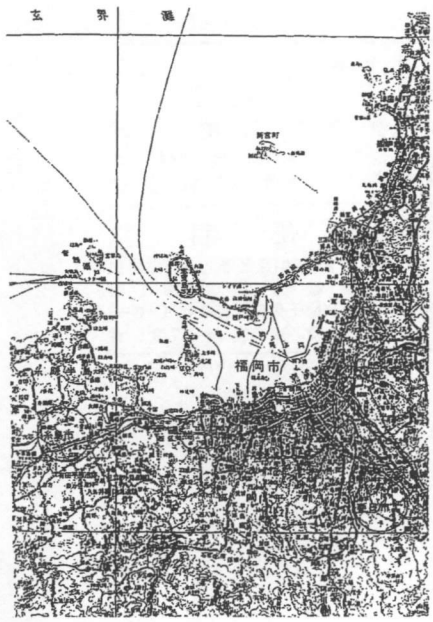


「親魏倭王」

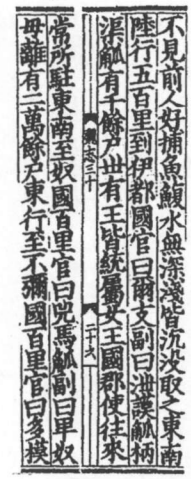
「魏率善倭中郎将」



「魏率善倭校尉」
（日本篆刻家協会
出田堵霞氏 刻）

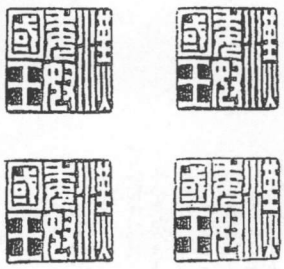


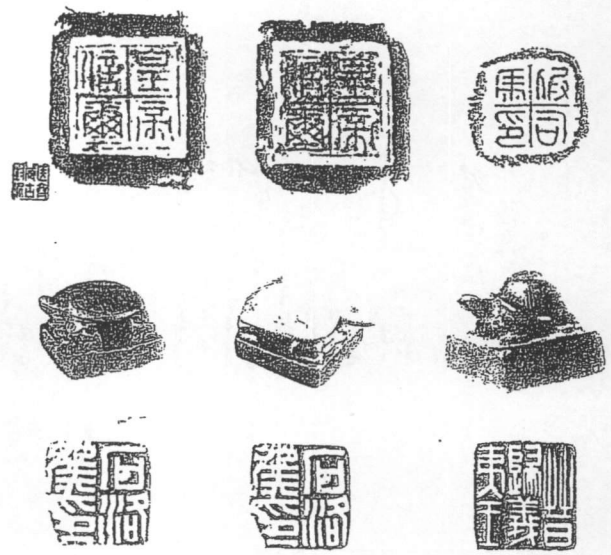
怡土郡井原村出土の後漢鏡図（文政６年＝1823）



伊都国と奴国
（『魏志倭人伝』）

図4



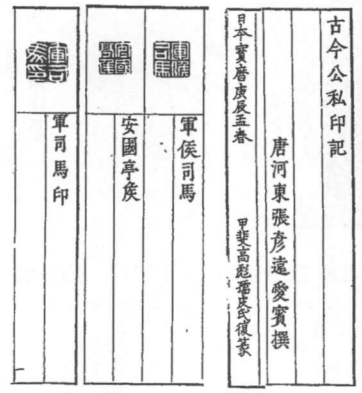


中国の「封泥と印章」資料の真偽の鑑別

三 親魏倭王印

親魏倭王

此印宣和集古印史ニ載ス鈕製ヲ脱ス惜ムヘシ按魏志曰景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰略今以汝為親魏倭王假金印紫綬略下又曰正始元年太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國



銅印

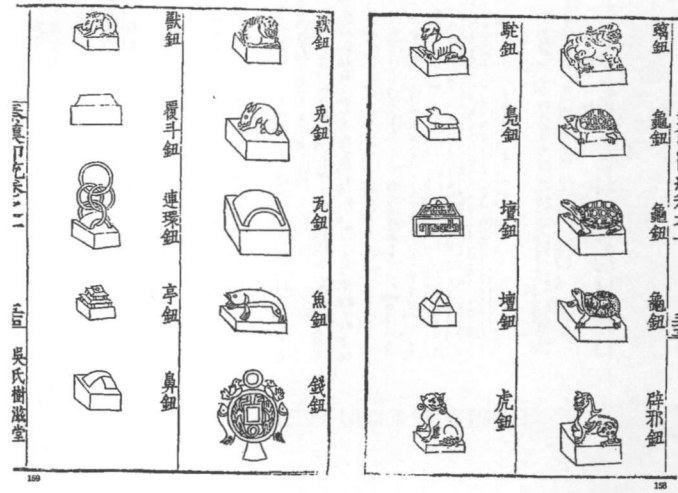
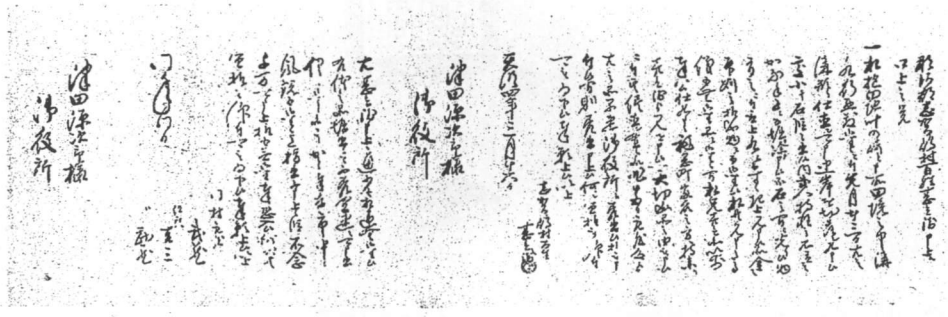


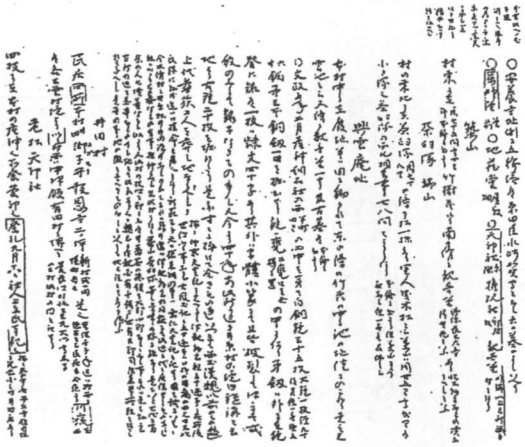
図5



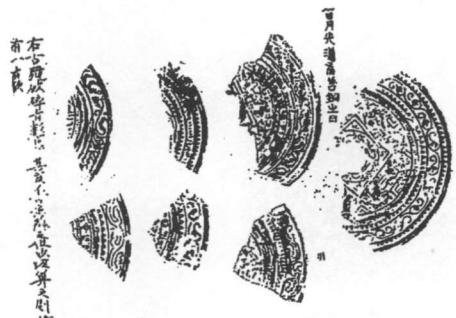
「百姓甚兵衛口上書」（天明4年＝1784）

『続風土記御調子ニ付調子書上帳』草稿（文政3年＝1820）

『怡土郡井原村所堀出古鏡図考』（文政6年＝1823）



『筑前国続風土記拾遺』（文政6年＝1823）



怡土郡井原村出土の後漢鏡図（文政6年＝1823）